

Oct. 11, 2003 波照間島

かつては余裕を持って進むことのできた南の小ジャングル入口一帯は、勝手のわかった人でなければとても踏み込めないほどに荒れてしまっていて、あきらかに人の往来が激減したことを示す。それでも奥へと踏み込んでいくと、いくらか道幅が広がって、リュウキュウミスジやルリタテハが陽だまりで遊んでおり、低い位置の葉っぱ上で休んでいる金緑色の光沢を輝かせたナナホシキンカメムシが目に飛び込んでくる。この島にはとりわけ個体数の多いシロオビアゲハが周囲の木影を縫うように飛び交う。テングチョウの八重山亜種も道路沿いの枯れた枝先を好んで止まる。ナミエシロチョウにしては前翅端のとがりぐあい角が鋭角となっているシロチョウが緩やかな飛翔であらわれたところをネットインすると、初めて手にするカワカミシロチョウのみだ。道がさらに広がったあたりではオオゴマダラがゆったりとした飛翔をみせてくれるが、総じてチョウ影は極端に少ない。



大きな貯水槽の左手から入り込める防風林沿いのブッシュは、7年前にくらべてやや貧相となつてはいるが、例のターゲットの一つであるシロノセンダングサがいくらか花を咲かせており、遠めにもナミエシロチョウが群れて遊んでいるのがわかり、自転車を進めて分け入ってみる。前翅端の黒が目立ち、裏面黄色が濃い個体はナミエシロチョウのメスでけっこう新鮮な個体が多い。日差しをさけるかのように陰となった林縁部分のセンダングサにこだわるのはリュウキュウアサギマダラ。やや小型でアサギ色がうすい個体は、近年八重山諸島で定着範囲を広げているヒメアサギマダラだと思われネットインして確認する。まちがいなくヒメアサギマダラのオスである。この群れの中にカワカミシロチョウは含まれていないようだ。シロオビアゲハもやってくるがⅡ型♀はこない。